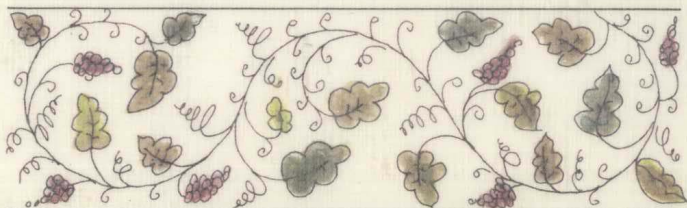


西域シルクロード全紀行



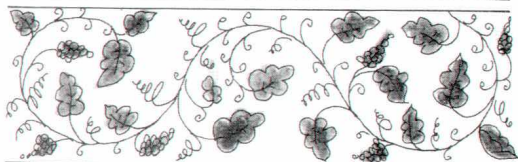
西域日誌

Chin Shunshin

陳舜臣

読売新聞社

西域シルクロード全紀行



西域日誌

Chin Shunshin

陳舜臣

読売新聞社

さいいき
西域シルクロード全紀行
ぜんきこう
5

さいいきにつし
西域日誌

一九九六年(平成八年)三月六日 第一刷

著者 陳舜臣
ちんしゆんしん

編集人 梅田康夫

発行人 伏見 勝

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
〒一〇〇-五五

大阪市北区野崎町五の九
〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の二
〒八〇二-七一

名古屋市中区栄一の七の六
〒四六〇-七〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り換えします
定価はカバーに表示してあります

ISBN4-643-96023-X C0395

Printed in Japan

©1996, CHIN Shunshin

西域圖志

目次

西域日誌

口絵

卷頭のうた……………4

卷頭のことば……………8

シルクロード旅ノート……………21

I ふたたび駱駝の銅像を……………22

II 羊、このよきもの……………33

III 歌舞の地……………44

IV 人の世というバザールは……………55

V 呼びかける塔……………66

VI 絹の道の絹……………76

VII 水こそ命……………87

VIII 絨毯ものがたり……………98

IX チャドルとターバン……………109

X	穹廬の人、土室の人……………	121
XI	シルクロードの宝石……………	134
XII	くだものの歌……………	148
XIII	酒の讃歌……………	163
XIV	シルクロードの壁画美術館……………	177
XV	名山、伝説、色々の山……………	190
XVI	シルクロードの歌ごえ……………	203
XVII	旅人たち……………	218
	文庫版あとがき……………	231
	敦煌のうた……………	235

カバードesign 陳幼芳
口絵写真撮影 陳立人

卷頭のうた

羅馬舉杯歌

ローマにて杯を挙ぐ

絲綢路畢且眉伸

絲綢路シルクロードは畢おほり且かつ眉まゆ伸のびぶ

石馬源流在大秦

石馬シマの源流げんりゅうは大秦ローマに在あり

遊客驩然探殿柱

遊客りやくは驩然かんぜんとして殿柱でんちゅうを探さがり

信徒恍惚測天人

信徒しんたは恍惚こうこつとして天人てんじんを測はかる

風光古迹千籠足

風光ふうかう、古迹ここつは千籠せんろう足あしり

男女時髦九陌塵

男女なんにょの時髦じもは九陌きゅうはくの塵ちん

忽接佳音欣握手

忽たちち佳音けいおんに接ふし欣よろこびて手てを握にぎる

蹄聲踏磴舉杯頻

蹄聲ていせい、磴いしざかを踏ふみ杯はいを挙あぐること頻しきり

眉伸 ほつとすること。愁眉をひらくに同じ。

大秦 中国でローマのことを大秦という。

驪然 よろこぶさま。

測天人 龔自珍の「己亥雜詩」に、「難憑肉眼測天人」（肉眼に憑りて天人を測るは難し）の句あり。

千籠 さまざまな美しい模様。「千草」あるいは「千叢」に同じ。李賀の「新夏歌」に、「曉木千籠眞蠟綵」の句あり。

時髦 流行のこと。ファッション（現代語）。

九陌塵 陌は街路。九は多いことをあらわす。王安石（おうあんせき）（一〇二一——一〇八六）に「何必區區九陌塵」の句あり。

シルクロードの旅が終わり

ほつと息をつくことができた

長安で見たペガサスの源流は

このローマにあることがわかり

たび人である私はいささかはしゃいで
古代建築の柱などに心をひかれて
だが この地を訪れるカトリックの信者は
そこに描かれたり彫られたりしている
天の楽園の人たちを見たつもりだろう
肉眼でそれが見えるわけではないのに――

ともあれローマは風光も古い遺跡も
さまざまな美しさがじゅうぶんであり

にぎやかな街に新しいファッションの男女がいっぱい
古さや新しさに圧倒されていたとき

とつぜん京都に嫁いだ娘から電話があつた

――赤ちゃんができたらしいわ……

私は妻と思わず手を取りあつた

ホテルの外の石だたみの道に

観光用の馬車が高らかに蹄の音を立てて通る

そのリズムにあわせて

私たちはなんども杯をあげた

シルクロードの終着地にたどりつき

おもいもかけぬ出発のしらせをきいた

人の世に

これはくりかえされたことであろう

歴史のローマのなかで

私たちも歴史のなかの人だった

『風騷集』より

卷頭のことば

東西をつなぐ人

東と西をつなぎ合わせたのは、十三世紀のモンゴル人であった。それまでは、アレクサンドロスにせよ漢の武帝にせよ、あと一歩で及ばなかったのである。東から行くにせよ西から行くにせよ、だいたいフェルガーナ（大宛）あたりが、息の切れる場所であったと思われる。そこを越えて行くことが、なかなか難しいのだ。東西をまとめることは、それほどの大事業であった。それに挑戦しようとした人たちも、東や西という意識はなかったにちがいない。地球がまるいことさえ彼らは知らなかったのだ。

世界が球形であることに、はじめて気づいたのは、海洋を航海する人たちであろう。大

航海時代と呼ばれる、十五世紀以降のことで、時期的には、モンゴルの世界制覇にすぐつづくのである。わかりやすくいえば、マルコ・ポーロがモンゴルから帰って、約百年後からはじまる時代にはかならない。私には草原の時代と海洋の時代は、連動しているように思える。

鄭和ていわの艦隊の第一次遠征は、一四〇五年のことであつた。草原と海洋をつなぐ人物は、鄭和その人であるといつてよい。鄭和は明の永楽帝えいらくていの命令で、航海に出たのである。永楽帝は明の始祖洪武帝こうぶていの子であり、首都を南京から北京に遷うつした。元とのあいだは、半世紀もはなれていない。

鄭和の家系は雲南出身で、イスラム教徒である。その祖先は、西域の人であろうという。明軍が雲南に入ったとき、家柄のよい美少年を去勢して、献上することがおこなわれた。鄭和少年は北京にいた燕王に献上されたのである。燕王は太祖（洪武帝）の第四子で、二代目の建文帝は父（洪武帝の長男）が、即位前に死んだので、孫として二代目を継いだ。それに不服だった燕王が、甥の建文帝を攻めほろぼして、帝位に即いた。これが永楽帝である。

鄭和は少年宦官かんがんとして燕王に仕えていたが、主人が皇帝となつたので、内宮太監に昇格した。これは宦官のトップであり、絶大な権限をもっていた。しかも建文帝を攻めたとき、永楽帝はモンゴル人部隊の力を借り、また南京宮内の宦官の内応に助けられている。した

がって、宦官はほかの時代にくらべて、遥かに有力であった。その頂点に立ったのだから、鄭和の力は絶大なものがあつたのだ。

永楽帝はモンゴルのフビライの後継者をめざしたという見方がある。

元というモンゴル政権をくつがえした明は、なにかにつけてモンゴルの色彩を払拭するのにけんめいだった。しかし、元の長い統治によって、草原の遊牧民と漢土の農耕民とは、一つの共同体をつくり、経済もその共同体のサイクルに合わせて動いていた。たとえば、草原で養った馬を、漢土で売り、その代金で日常の必需品を買うのが遊牧民の生活であった。それが元の後退によって、国境線が引かれ、二つの国に分れたのである。その国境線を除くこと、すなわち一つの国にすることが、自分の任務であると永楽帝は思った。

収縮してとじこめることを国是とした、父の考え方とちがうのだ。漢民族だけで固まることは、国境線を取り払う永楽帝の行き方とはちがう。これでは一つの王朝としての継続性はない。永楽帝から、別の王朝になったという考え方がある。

皇帝を呼ぶのに初代あるいは特にすぐれたものに「祖」をつけ、それ以外は「宗」をつけるのがふつうである。唐は初代の李淵だけが「高祖」であり、李世民がいかに事実上の王朝建設者であろうと、「太宗」にとどまっている。モンゴルはチンギス・ハーンが太祖であるが、元という国号を定めたフビライは、「世祖」と呼ばれる。草原の覇者のチンギス・ハーンとその孫であるフビライの二人を、特別扱いとしたのだ。

明は開国の洪武帝を太祖とし、永楽帝を成祖とする。建文帝を含めると、明は十七人の皇帝がいるが、祖をつけて呼ばれるのは二人だけなのだ。二人だけと言うべきか、あるいは二人もいたというべきであろうか。ともあれ、創始者格の皇帝が二人いたことになる。こんなことから、明には創始者が二人いて、二つの王統とする解釈が生まれてくる。あるいは首都を南京から北京に遷したことを以て、二人の祖をいただく理由と解するむきもある。ともあれ永楽帝という人は、ふつうの人ではないのだ。

始祖の洪武帝は、民族国家をめざし、出費を抑え、かなりの蓄積があった。息子の永楽帝は反対に、世界帝国をめざし、経済面でも積極策に転じた。未曾有の大艦隊の派遣もその一環だったのである。

永楽帝の派遣した七次の航海（最後の一回は永楽帝の死後）は、一般には「西洋取宝船」と呼ばれている。国威をかがやかせるため、といわれているが、そればかりではなかったはずだ。

取宝ということばでもわかるように、交易の利をめざしてもいたのである。交易というが、国営のそれであったのだ。

第一次の航海は、永楽三年（一四〇五）に出発した。巨船六十二隻に、二万七千八百余の将兵が乗り組んだ。当時はまだ遷都前で、首都は南京である。船は南京の宝船廠という所でつくられた。一隻の長さは四十四丈（一五〇メートル）、はば十八丈（六二メートル）

であつたという記録がのこっている。これは『明史』にのせている数字だが、あまり大きいので、誇張があるとみられていた。なにしろ現在の八千トン級の船に相当するのだ。九十三年後に、喜望峰をまわつたヴァスコ・ダ・ガマの率いる艦隊の旗艦が百二十トンだつたのである。

百余年前のマルコ・ポーロの時代に、「以前は今よりもっと大型の船を使っていたが、南海の島々に設けられた荷揚げ海岸は、常に激浪のために破損されて、今ではたいいの所にそんな大型船を停泊せしめるに十分な波止場がなくなつてしまつたために、やむなく昔に比べてずっと小型の船を使っている」と述べられている。それでも最高三百人の水夫をのせ、数隻の小型船を同伴して航海するが、小型船といっても水夫の数も六十人から八十人、時には百人に達する外、なお多数の商人を乗り組ましているという。

また南宋の記録に、イスラム商人がインド南端のクランで自国船から中国船に乗り換えるという記述がある。したがって中国船の記述に誇張があるというのは信じられない。

はたして一九五七年に、南京郊外の宝船廠跡から、巨大な舵^{かじ}が出土し、船の大ききの記述に誇張がないことが証明された。

艦隊は蘇州の劉家河、通称「六国碼頭」から出発したが、六十数隻の巨船群は、おそらく壯觀であつたろう。

第一次から第三次までは、チャンバ、マラッカ、セイロンからインド西海岸のカリカッ

トまでであった。第四次はペルシャ湾のホルムズまで行き、別動隊はマルディブ群島からアフリカ東海岸に達し、北上してアラビア半島のアデンなどに寄っている。

鄭和はイスラム教徒であったが、二万八千の乗組員にもイスラム教徒はすくなくなかつたであろう。だから、別隊をメッカに派遣している。鄭は彼が宦官として出世しはじめたころに受けた姓で、もとの姓は回教徒に多い「馬」であつた。

清末に鄭和の父の墓が発見され、その墓誌によつて「馬哈只」と姓名が確認された。哈只^{ジャ}は固有名詞ではなく、メッカに参詣した者が受ける、一種の称号である。航海に出る前に、彼は福建の泉州の回教寺院で礼拝をおこなつていた。

この国家的事業である遠征は、なぜおこなわれたのか、おそらくいくつかの理由が複合しているであろう。

国威宣揚、交易の利などは、誰もが思いつくことである。そのほかよく言われていることは、建文帝の行方をさがすということだつた。南京城が陥^おちたとき、建文帝はみつからず、遺体も出てこなかつたのだ。だから、建文帝の搜索はずっとつづけられていた。海外にのがれたのではないか、とも考えられたのである。西洋取宝船は、じつは建文帝搜索の任務を帯びていたと、当時からひそかに言われていた。

つぎに最後まで洪武帝（朱元璋^{しゅげんどう}）に反対した、蘇州の張士誠の海上勢力にとどめをさすことも、考えられる理由であろう。だが、このころには、もうそんな勢力のおそれはなく

なつたといえる。

明が当面の敵の背後勢力と結ぼうとしたことは、主目的ではないにしても、十分考えられる。すくなくとも「示威」の効果はあつたはずなのだ。

チンギス・ハーンみたいな人間があらわれたらどうしよう。——これは農耕民だけではなく、遊牧の人たちにとつても、大きな問題であつた。チンギス・ハーンがあらわれて、ほぼ二百年になる。その末裔で元王朝を樹てた人たちも、漠北に駆逐されてしまった。草原や沙漠に、政權を立てた人たちも、おもに後継者争いで、勢いを失っている。

そこにあらわれたのは、ティムールであつた。チンギス・ハーンに、血統的につながる名門の出身だと称しているが、ただの牧人の子にすぎないともいわれている。片足が不自由であつたので、「タメルラン」と呼ばれていた。これは「Timur Lang」(跛者ティムール)を縮めて呼んだのである。少年時代に、家畜泥棒をはたらいて、私刑を受けたのだといわれている。じっさいにティムールと会つた、スペインの騎士クラブihoは、はじめ数人の部下をもつ小貴族だつたと述べている。

なぜクラブihoがティムールに会いに行つたかといえば、ローマ教皇がオスマン帝国に對抗するために、その背後にある勢力、すなわちティムールと結ぼうというわけである。ティムールの首都サマルカンドは、このような外交戦が盛んな場所だつた。前記のクラブiho